

# 幼稚園教育の科學的研究の前途

——ダビッドソンに據る——

紹介子

茲に幼稚園教育と科學的研究といふ二つの言葉を結びつけた標題を掲げると多數讀者の中には、種々不審を懷かれる方があるであらう。

近代科學といふ言葉を聞くと直ぐにエンヂンや機械工藝や外科手術や統計表を思ひ出す人々は幼稚園教育の科學的研究などといふことを滑稽に感ぜらるゝかも知れない。一寸考へてみても、エンヂンや機械工藝を無邪氣な、たわいのない、一見無意味な兒童に關する事柄と結び付けることは正さに不條理である。科學といふもの、兒童といふものを上述の如く解する限りに於ては、幼稚園教育の科學的研究といふ言葉は何うしても滑稽に感ぜられる。

それから又、他の人々には、この幼稚園教育の

科學的研究といふ言葉は僭越に聞えるかも知れない、精緻周到な用意を以て研究調査に従事して居る科學者は幼稚園の不完全な訓練や確固たる知識の窮乏や獨斷や無批判を見て幼稚園教員の科學的研究といふ言葉は僭越であると思ふに相違ない。

彼等は冷笑しながら言ふであらう、科學者と兒童教化者とを一身に兼ねやうなぞとは却々六ヶ敷い藝當であると。我々は斯ういふ冷評に對して、悲しいことながら、目下のところでは抗議を申込むことが出来ない、たゞ我々には恃むべき未來がある、而して我々は力の盡りその方向にむかつて急ぎ進みつゝあるといふことを言ひ得るのみである。

それから又、或る種の人々には、幼稚園教育の

科學的研究といふ言葉は些の新味をも有せぬ平凡

のである。

無味の言葉と響くかも知れない。さういふ人々は

科學的研究及び幼稚園教育なる二つの言葉の結合は次のやうなことを信ずる人々に取つては大きな、重要な事柄の豫言として聞かれるであらう、

とにかく多少科學的研究といふものを嚙つて居て科學者の著書や談論に啓發されてゐると同時に兒童研究の大家の説にも一わたり眼を通して居ると稱するであらう。こんな風に幼稚園教育の科學的

即ち一般社會の福祉といふものは人類の天稟と能力を十分に開發するといふこと、緊密な關係を持つといふこと、人間力の開發に於ては孰れの部分でも輕んぜられて關はないといふことはない、

研究といふことを既に澤山の人々が心得てゐるとしたならば何の必要があつて「幼稚園教育の科學的研究の前途」などといふ長たらしい標題を掲げて無用の言辭を弄するのであるか？それは今度は

即ち幼稚園に於ても大學に於ても均整的の發達といふことが心掛けられなければならないといふこと科學といふもの、効能は科學の力が要せらるる場合にその力を假すといふ點に存するといふこと、

は恐らく滑稽な程無智であらう、又それが爲めに獨斷的でもあらう、しかし我々は是等の冷罵に惑はされて我々の實際上の仕事を忽にしてはならない。而して所謂科學的努力が幼稚園教育といふものに加へられた爲めに、日々の義務が如何に分りにくいものとなつたかといふことを一番よく知つてゐるものはその局に當つてゐる我々より外はない

未來に於ては卓拔な科學者が深い慈悲心を持つに至るといふこと、先生や兩親や學校當局者が單に犧牲的精神を有するに止らず、科學者の提出すべき如何なる質問に對しても應じ得るやうになるといふこと、斯ういふことを心から信じて疑はぬ人々こそは幼稚園教育の科學的研究といふ言葉の荷

我々の方が批評的になつて居るからである。我々は恐らく滑稽な程無智であらう、又それが爲めに獨斷的でもあらう、しかし我々は是等の冷罵に惑はされて我々の實際上の仕事を忽にしてはならない。而して所謂科學的努力が幼稚園教育といふものに加へられた爲めに、日々の義務が如何に分りにくいものとなつたかといふことを一番よく知つてゐるものはその局に當つてゐる我々より外はない

未來に於ては卓拔な科學者が深い慈悲心を持つに至るといふこと、先生や兩親や學校當局者が單に犧牲的精神を有するに止らず、科學者の提出すべき如何なる質問に對しても應じ得るやうになるといふこと、斯ういふことを心から信じて疑はぬ人々こそは幼稚園教育の科學的研究といふ言葉の荷

つて居る使命を實に重く且つ貴く思ふであらう。我々の今述べんとして居る幼稚園の科學的研究といふ言葉は斯る意味を持つものなのである。

標題に關する辯護はこの位にして置いて、次ぎに我々は少しく實際的問題に向つて話を進めて行きたいと思ふ。最近に於て我々は幼稚園の仕事に於て極めて著しい科學的態度を示して居る實例を見ることが出来る。その實例は我々に如何なる教訓を與へつゝあるか？ モンテッソリーは幼稚園教育の科學的研究の可能性に就て如何なることを示したか？ モンテッソリー以前に於ては、モンテッソリー程に近代科學の力に頼り、その實驗に基礎を置き、教育的努力に依つて編み出された諸書をあまねく涉獵したものはない。

モンテッソリーに於て、我々は既にユメーンな完成された科學者の出現を経験し、而してモンテッソリーによつて科學的の智識と方法とが有効的に且つ徹底的に教師や両親に教へられたと思つて

よいであらうか。これに對しては「然り」と「否」との二様の答がなされるのである。

モンテッソリーの研究は成程或る部分は驚くべくサジェエスチヴで而して有益である、而かもそれが科學の使命を遺憾なく果たしてゐるとは決して言はれないのである。氣の毒ながらこれ以上にモンテッソリーの辯護の仕様を我々は知らないのである。

科學といふものは、その全き權威を以てする時は、ある目的のための手段や方法とは全然没交渉に、科學は科學として探求されなければならぬ。而して事實と結論とが我々の前に提出される、我々はその内から道理に適つたものを自由に選び取りさへすればよいのである。斯う解釋して來るとモンテッソリーに對して苦情を申込むことは少しくお角違ひになる、モンテッソリーの説法と争ふ必要もなければ又その實驗に對してとやかういふ必要もないことになる。何故ならば科學者はいつ

も全然確かな結果を發表するものとは決つてゐないからである。

けれども我々はモンテッソリーの貢獻の内に動かし難い眞價の潜んで居ることを決して忘れてはならない。若し我々がモンテッソリーの大體を見ることが避けて、その末節の短のみを擧げやうとするならばそれは甚だ卑しい行爲でなければならぬ、目的及び方向に就ていふならば、我々はモンテッソリーの進んで行つた道を承認するに當かなものではない。モンテッソリーは前行者の凡庸な繼承を以て甘んじてはゐなかつた。モンテッソリーは細心の識別を以て伊太利教育界の無能を感知した、而して現代の教育的人類學及び實驗心理學の應用の限界を明かに指示した。是等は心身の測定に役立つた。恐らく、それは必要な任務であつたからであらう、而かも是等のとは教育の中心問題とはあまり縁のあることではなかつた。モンテッソリーは伊太利教育界の實狀を簡單に纏めて次のやうに述べてゐる。

「人類學も心理學も未だ嘗つて教育の事に向つて盡力したことはない、それと同じやうに科學的に訓練されたと稱せらる教師も未だ嘗つて眞正の科學者の標準にまでは立ち至つてゐない。教育といふものが實際的の進歩を遂げるためには理論と實際とが巧に結合されなければならない、この結合こそは科學者をして重要な教育の分野を見しむると同時に教師達を今日のやうな低い智識の水平線から引き揚げるべきである」

モンテッソリーは更に進んで驚くべき仕方にて、幼児及び一般社會に對するユニオンな興味と科學者の氣分、心持とを巧みに結合させたのである。女史は云ふ――

「科學者とは何であるか？科學者とは機械の巧みなる操縦者を意味するものではない。我々の名けて科學者といふ人々は、實驗といふものを、人生の深き眞理を探求する爲めの又、人生の蠱惑的な秘密からヴェールを掲げ去るための手段であると感ずる者である、而して又、その探求に従事して

ある内に、その心の内に自然の神秘に對して愛の感じを湧き起し、遂には自己を考ふる暇なきまでに情熱的となり得る人々である。

されば教育の分野に働く人々が科學的精神を以て進むことは實に望ましいことであつて、是等の人々が十分よく導かれることが刻下の急務である。換言すれば教育者が自然現象に對して興味を懷き、自然を愛するが爲めに、實驗の用意をと、のへてそこに自然の啓示を待たうとする科學者の熱心の態度、憧憧の態度を學ぶやうになることが望ましいといふのである。」

けれどもこの注意深い憧憬の態度、即ち眞理を眞理として喜ぶといふことだけでは未だ十分ではないとモンテッソーリは説く。我々は常に我々を社會的に將又個人的に向上せしめて行くことを心掛けてゐなければならぬ、それ故科學にも亦この人道的な衝動が當然附加せられてゐなければならぬのである。この二つが結合して始めてモンテッソーリの希求して居るところの理想の「教育的

科學的人道主義者」が現れるのである。尊敬、愛、神聖なる好奇心、努力慾、是等の混合を以て、教育者は小さい子供のすべての表現を看守つてゐなければならぬ。

モンテッソーリが我々に向つて説く所の最高の理想は大體以上の如きものである。我々は之に對して安んじて賛同の意を表すべきである。又この教育説は歴史的にも大いに價値を持つべきものであることを我々は信じて疑はぬのである。

子供を可愛がるといふことはチツとも珍らしいことではない。教育史を繙いて見ると幼児を熱愛した人の例は澤山ある。しかし古い教育學に缺けてゐる所のは科學的の用心深さと忍耐強い期待と正しい豫斷とである。古い教育者は澤山の假定を持つてゐて、それを勝手に子供に當拵めて觀察した、理論や哲學で豫じめ決めて置いた事柄を子供のしぐさから無理に讀み取つて折角の觀察を不正當なものとしてゐたのである。

茲に於て、我々は最早、これから先、幼兒の教

育的研究に適當な科學的な方向や態度を我々に示してくれる人をモンテッソリー以外に求めなくともよいといふことを安心して承認するのである。この點に關してはモンテッソリーがすべてを我々に用意してゐてくれる。しかしモンテッソリーの偉なる點はこれに止らないのである。

從來の學校といふもの、概念はモンテッソリーによつて全く新にされた。學校は科學的教師の實驗所といふことになつた。我々は又學校を教師の觀察のための道場としなければならぬ、學校の内に科學的教育學を生せしめやうといふならば學校は兒童の自由な自然な表現を許さなければならぬ。これが本質的の改革である。教師的科學者の第一の任務は科學者の有すべき周到緻密な態度を以て現象を知らうとすることである。教育は何よりも先づ診斷的でなければならぬ。現象が理解されたならば、最上の確信を以て、豫じめ結果を豫想することなしに、種々の實驗を行つて見なければならぬ、處方書が効を奏さなくとも誰も咎め

らるべきではない、更に進んで實驗を開始する勇氣と熱心とがなければならぬ。

我々はモンテッソリーと、その自由の説自發的表現の改修に就て争ふ必要はない、モンテッソリーはたゞ自分の説を統一するために斯う言つて居るに過ぎないのである。眞の教育を行はふとするには、在來の方法習慣を盲目的に踏襲するのみでは駄目である、何うしても統一のために分析され理解されるべき要素と勢力とを以て實驗を行はなければならぬ。このことは目下の教育界に於て服膺するべき第一のことである。

モンテッソリーは以上の如く態度及び方向に於て科學的であるばかりでなく、その取らんとしつゝある方法に於ても大いに科學的である。モンテッソリーの實驗は大部分子供と一緒にされる。何故ならばモンテッソリーは子供の力を解放しないやうなものや子供の根本的の興味をしっかりと掴んで、それを働かせることの出来ないやうなものやを擯けるからである。(未完)